# 学会記事 Newsletter

## 理　事　会

日　時：昭和53年9月30日，13:00～16:00
場　所：赤門脇学士会館
出席者：井上英二会長，中島章，藤木典生，岡島道夫，半田順俊各理事，井関尚栄前会長，渡辺厳一大会会長，三輪史朗教育委員長，外村晶，笹月健彦，日暮真各幹事
議　題
報告事項
1) 日本学術会議「心脈血管研究連絡委員会発達障害分科会」委員推薦（既報）.
2) 次期医学会総会会頭として本学会より山村雄一阪大教授を推薦.
3) 編集，ネットワーク，教育各委員会の報告.
4) 国際人類遺伝学会議常置委員会，国際遺伝学連合，日本医学会評議員会，学術会議IUBS研連遺伝分科会，遺伝子操作連絡会議，科学研究費等についての報告.
5) 本年度大会準備状況の報告.
6) 来年度大会準備状況の報告.
審議事項
1) 年会費を5,000円に値上げすることが承認された.
2) 外国人会費は円建てとし，雑誌のみ購読する外国人に対しては販価を別建てとすることが了承された.
3) 次々期大会開催候補地.
4) 名誉会員の推薦.
5) 日本学術会議IUBS研連遺伝分科会に設置する人類遺伝学小委員会の構成について.

## 日本人類遺伝学会教育委員会

第1回委員会（昭和52年11月12日，於宇部）に続き，第2回委員会（昭和53年10月30日，於新潟）が開かれた．科学研究費総合B 申請の件，「医学課程における遺伝学の教育」に関する報告書作成の件などが討議された．後者については，昭和55年3月完成をめどに，欧米各国のカリキュラム収集，わが国の実態調査，コア・カリキュラム例示のための資料作成，等の作業進行日程が検討された．

（浅香昭雄）

## 遺伝子操作連絡会議報告（第2回）

前回（人類遺伝学雑誌**23**:194），この会議の第1回の会合について報告した．その後，組換えDNA研究検討ワーキンググループを改組して遺伝子操作基準検討委員会（委員長飯野徹雄氏，東大理学部）が発足し，3分科会に分かれて作業を行ない，53年7月15日にその報告がまとめられた．

その結果をふまえて，文部省学術審議会は「大学等の研究機関における組換えDNA実験の進め方

について」(学術月報53年9月号) を中間とりまとめとして公表した．これには実施にあたっての現時点での指針がしめされているが，この指針は必要に応じて更改が加えられることも確認されている．

53年8月14日の第2回の遺伝子操作連絡会議では，これらの経過が説明された．今後の方針について討議の結果，研究者の自主組織としての遺伝子操作協議会（仮称）を関連学会を基盤として発足させること，協議会の中に評議会と遺伝子操作委員会を設けることが合意された．

この中の委員会の方は，当面操作の実験的指針に関する検討を引続き行なって，必要な改訂についての提言・勧告を随時行なうとともに，その自主組織の事業範囲，運営方策について検討することになった．

そのために専門の研究者である前記の3分科会の主任および幹事，およびこれとほぼ同数の評議会との協議による委員によって構成され，内田久雄氏（東大医科研）が世話人となって発足することになった．

他方の評議会は，関連学会より推薦された評議員によって構成され，上記の委員会の活動情報などを学会に連絡するとともに，学会よりの要望・提言などを評議会を通じて委員会の活動に反映させることになった．なお，この遺伝子操作協議会は自主的運営をするという建前から，その運営に要する経費の少なくとも一部は評議員を選出している学会からの財政援助によることが適切であるという判断を示した．

日本人類遺伝学会は，以上について理事会および評議委員会で検討した結果，前記評議会に委員を推薦すること，および2万円を拠金することが決定された．委員としては新たに理事を委嘱された外村晶氏を選び，その旨内田世話人に報告された．

なお，以下の資料については遺伝子操作基準検討委員会飯野委員長，遺伝子操作連絡会議内田世話人，あるいは人類遺伝学会選出委員外村理事に申し出れば入手できる．

（発達障害研究所遺伝部　藤木典生）

Recombinant DNA Technical Bulletin. Vol. 1. No. 1
N.I.H., U.S.A. (Fall 1977)

Environmental Impact Statement on N.I.H. Guidelines.
Part. 1. N.I.H., U.S.A. (Oct. 1977)

- 遺伝子操作研究関連資料集(訳)
  第2集　科学技術庁計画局（昭和53年3月）
- 組換え DNA 実験に関する指針(訳) フランス（1977年12月）
- 核酸（DNA）の安全取扱いに関する実験指針(訳) ドイツ連邦共和国（1977年12月）
- 遺伝子操作の実施に関する作業班の報告書(訳) イギリス（1977年12月）
- 遺伝子操作基準検討委員会報告（昭和53年7月）
- 大学等の研究機関における組換え DNA 実験の進め方について（中間とりまとめ)—学術審議会科学と社会特別委員会（昭和53年7月—学術月報　398号（昭和53年9月）

## フィンランド，オーランド自治領マリーハム市での「隔離集団の集団遺伝学的研究」のシンポジウムに出席して

「隔離集団の集団遺伝学的研究」(Population Genetic Studies on Isolates) というシンポジウム

が，1978年8月13日～16日にフィンランドのオーランド自治領マリーハム市で開催された．主催はシーグリド・ジュスリウス財団で，出席者は約40名，別掲のプログラムの内容を，集団遺伝学者，臨床遺伝学者がたがいに共通点を模索した有意義な会合であった．

シンポジウムは過去20年間行なわれた，オーランド諸島の集団構造についての人口動態学的報告から始まった．この面の研究と，臨床面の応用については，まだ抽象的でもう一歩という印象を受けた．隔離集団の集団構造ではニール博士の酵素変異を用いてのヒトにおける中立突然変異率 $1.5\times10^{-5}$/'gene' が比較的具体的であったが，一般に抽象的で実用性を考えさせられた．

4時から，このシンポジウム唯一の臨床遺伝学のトピックスとして，眼の遺伝がとりあげられた．順天堂大学の中島章は，わが国の眼疾患の遺伝について，その遺伝的異質性，眼障害の遺伝的荷重が0.15，4種のいとこ婚で X 連関の近交係数が0の割合が多いこと，小眼球児が第2子に多くみられることなどを報告した．討論にあたって，これらの結果を遺伝相談など具体的な臨床例にどのように応用するか活発な発言があった．その他，ベルギーの失明原因について，また黄斑変化症の大家系についての報告があった．

夜はポスター展示があり，30分ほどネバリンナ博士による説明から始まった．フィンランドの隔離集団でとくに報告されたまれな遺伝性疾患を実例として，近親婚頻度，ビン首効果，先住者効果など，集団遺伝学の現象をうまくつかって説明したのは印象的であった．個々の疾患については，それぞれのポスターの前で，実際に調査を行なった若い人たちが熱心に説明してくれた．

2日目は遺伝的多型の話で始まったが，いずれもすでに発表されているものを述べたもので新鮮味は少なかった．ボドマー夫妻は，HLA の解説とその疾患との関連性について話をした．HLA との関連を調査するのに，自己免疫疾患と感染症における細胞反応の2面から研究するというのがその主旨でもあった．午後は再び隔離集団における遺伝性疾患の話で，ソビエットのウズベック共和国での研究，アシュケナジックユダヤ人に多いといわれる Tay-Sachs 病の集団遺伝学的根拠やユダヤ人の史などは興歴味深く聞いた．オーランド病といわれる優性遺伝病の Willebrand-Jüngens 症候群の話も非常に印象的であった．

最終日の2つのセッションのうち，エジプトのハーシム女史の話はとくにおもしろかった．エジプトはナイル河沿いに集落があり，まわりを砂漠にとりまかれた陸の孤島ともいうべき隔離集団がある．そこでは近親婚も非常に高く，遺伝性疾患も〝症候群〟とはいえない2種類以上の〝症候群〟が同一人に，つまり，遺伝性疾患が重複しているという話はかなりショッキングでもあり，討論も活発に行なわれた．また，オセアニアの島々の住民についてオーストラリアの Kirk から，北極圏のラップ族，エスキモーについてカナダのシンプソンから，そしてユダヤ人については McKusick と Motulsky, Goodman から，詳細な人類学的，人類遺伝学的な研究の報告があった．とくにユダヤ人についての研究は詳細をきわめ，これ以上やることがあるのかというような声も聞かれたくらいであった．とくに，アーシッシュジューについてはアメリカ合衆国内にもこのような隔離集団が今でも存在しているのは驚くべきことである．1981年9月にエルサレムで第6回国際人類遺伝学会が開かれるのが楽しみである．最後にニール博士を座長とするセッションで，各地の代表的な隔離集団についての報告があり，30分程度の一般討論のすえ，シンポジウムを終えた．

臨床側の話の多くに集団遺伝学の理論を応用するという努力がみられたのは興味深いし，また評価されてもよいと思う．それにもかかわらず，集団遺伝学者の多くが，その学問的討論に多くの時間を費やしたのはやむをえないとしても，臨床面への応用をもうすこし努力して欲しかったような気もする．とはいえ，通常まれにしかみられぬ疾患が隔離集団でよくみられる現象を利用して，集団遺伝学

的手法が臨床遺伝学に十分役立つことを立証したことを考えると，このシンポジウムも一応の成功をおさめたといってよかろう．

オーランドはボスニア湾口，バルチック海に面した所に位置し，6,500余の島からなる人口約22,000の自治領である．マリーハムには約10,000人が住み，到着したときは雨が降ったりやんだりで，飛行機からみた虹が印象的であった．

最後にジュセリウス財団の由来について，ふれておきたい．当財団は F.A. Jusélius という実業家が，自分の娘が不治の病で11歳で夭折したことをいたみ，その死にあたって残した遺言〝人類にとって不治である病気との闘いに，言語，国籍を問わず医学研究を推進すること〟を主旨として設立された．1965年に第1回のシンポジウムを開催して以来，今回が第7回目に相当する．今回のシンポジウムもジュセリウス氏の目的に沿うものであったことは間違いなかろう．

なお，このシンポジウムの内容は Academic Press より発刊される予定である．

（放射線医学総合研究所遺伝研究部　安田徳一，順天堂大学医学部眼科学教室　中島　章）

# 投 稿 規 定 (1976年6月改訂)

投稿者の資格　本会会員による投稿が優先されるが，会員外の共著者を含むことは差しつかえない．

論文の種類　原著を主とする．他にとくに優れた総説，および人類遺伝学の研究に有用な資料を掲載する．他の刊行物に掲載された論文は受付けない．

原稿の部数　2部

用語　十分に推敲された英語，ドイツ語，またはフランス語が望ましい．

本文の用紙　A4判，またはこれに最も近い大きさの厚手の用紙．

原稿の体裁　欧文の場合はタイプライターを用い，1行60字 (letters) 1頁25行まで（ダブルスペース）を標準とする．和文の場合は，400字詰原稿用紙を用い，平がな，新かなづかいによる．図表とその説明はすべて欧文とする．これに欧文の摘要を添える．

原稿の表紙　表紙にはタイトル，著者名，所属機関名とその所在地のみを欧文と和文で記載する．本文は第2ページから書きはじめる．

図表　1枚ずつ本文と同じ大きさの用紙を用い，挿入場所を本文に朱書する．

図と写真　写真は本文と同じ大きさの台紙に貼り，図とともに番号をつける．図で凸版印刷するものは，そのまま製版できるように黒インクを用い鮮明に書く．裏に刷り上り寸法を指定する．ただし，印刷のために，多少の変更を行うことがある．図と写真の説明は別の用紙にまとめて記載する．

文献　本文または図表に引用したものに限り，論文の末尾にまとめ，著者姓のアルファベット順に記載する．各文献はすべての著者の姓名，年度，表題，雑誌名 (World List of Medical Periodicals の略記を用いる．単行本の場合は書名，編集者名と発行所)，巻数，ページの順に記す．本文，図表中の引用は，Dahlberg (1950) または (Dahlberg, 1950) とし，番号は用いない．

例：Dahlberg, G. 1950. Methods for population genetics. *Am. J. Biol.* **25**: 90-104.

論文の校閲と採否の決定　本会編集委員会が行う．編集委員会は，著者に原稿の訂正を求めることができる．上記の規定から著しくかけ離れた原稿は受付けないことがある．

校正　初校に限り著者校正とする．

印刷費および別刷　本会会員の場合は，印刷7ページ以内は無料とする．超過ページの印刷費，版下および凸版の作製費，複雑な表の組版代，特殊な印刷用紙代等は著者負担とする．別刷は50部までは学会が費用を負担し，それ以上は著者負担とする．会員外の場合は，印刷費，別刷代はすべて著者負担とする．ただし，依頼原稿については別に定める．

論文の送付　下記の編集委員長へ：

東京都文京区湯島 1-5-45 (〒113)　東京医科歯科大学法医学教室　岡島道夫

**事務連絡**　校正，印刷等に関する事務連絡は下記の編集幹事へ：

東京都文京区湯島 1-5-45 (〒113)　東京医科歯科大学難治疾患研究所　笹月健彦

人類遺伝学雑誌　第24巻　第1号

昭和54年3月31日発行　　発行人　笹　月　健　彦

売捌人　外　村　　晶

発行所　東京都文京区湯島1丁目5番45号

東京医科歯科大学人類遺伝学研究室内

日本人類遺伝学会

(振替口座　東京68826)

文部省科学研究費補助金（研究成果刊行費）の補助による